曇鸞浄土教の研究——同時代的視野からみた実践と思想——

内田准心

【目次】

序論
一、先行研究の問題点
二、本研究の方法と概略
第一章　曇鸞の生涯の再検討
はじめに
第一節　曇鸞伝の基礎的考察
第一項　『続高僧伝』「曇鸞伝」の概略
第二項　「曇鸞伝」にみる思想背景の概略
第二節　帰浄以前の思想的素養
第一項　五台山仏教
第二項　四論・仏性
第三項　『大集経』
第四項　道教的長生法
第三節　浄土思想との接点
第一項　回心に関する従来の説
第二項　『観経』の普及状況
第三項　六大徳の浄土信仰
おわりに
第二章　曇鸞と北朝社会
はじめに
第一節　曇鸞と国家との関係
第一項　曇鸞に対する皇帝の帰依
第二項　曇鸞が皇帝の帰依を受けた原因
第二節　曇鸞と北魏・東魏仏教界における国家権力との関係
第一項　北魏・東魏仏教界の皇帝観
第二項　曇鸞の著述にみえる皇帝観
第三項　北魏・東魏仏教界における僧官制度の功罪
第四項　『論註』にみえる権力闘争への意識
第三節　『論註』の社会認識と本願観
第一項　『論註』上巻の荘厳相解釈の構造
第二項　『論註』の願文の特異性—曇鸞の社会認識—
おわりに
第三章　曇鸞と同時代の実践との関係
はじめに
第一節　八番問答における願生と滅罪
第一項　八番問答における願生
第二項　僧稠らの『観経』解釈と曇鸞の十念往生説
第二節　五念門における願生
第一項　礼拝門における願生
第二項　讃嘆門・作願門・観察門における願生
第三節　『論註』における階位の超越—南岳慧思との比較を通

して―
第一項　『浄土論』と『十住毘婆沙論』「易行品」における「速」
第二項　『論註』における「速」
第三項　速疾成仏をめぐる論争
おわりに
第四章　曇鸞と同時代の諸思想との関係
はじめに
第一節　『論註』における総相・別相―地論宗の六相との関係から―
第一項　『論註』における総相・別相
第二項　地論宗における総相・別相
第三項　『論註』における願生偈の位置づけ
第二節　『論註』と『大乗起信論』の「専意念仏説」
第一項　難易二道説をめぐる問題
第二項　『起信論』の「専意念仏説」
第三項　『論註』と「易行品」と「専意念仏説」
第三節　曇鸞における龍樹崇拝
第一項　道場・慧海・道詮の浄土信仰
第二項　曇鸞における龍樹崇拝
おわりに
結論

本論文の目的

曇鸞の思想背景の研究は、インド由来の龍樹を中心とする中観系の思想からの影響、世親を中心とする唯識系の思想からの影響、そうでなければ中国の鳩摩羅什やその門下、とくに僧肇の思想からの影響という三つの視点によって論じられたものが多い。しかし、上記の祖師たちの影響からのみで曇鸞の思想を語ることに問題がないわけではない。例えば、龍樹・世親は時代的、地域的に曇鸞とかけ離れた人物であり、鳩摩羅什・僧肇にしても、時代的に曇鸞とはおよそ百年のずれがあり、社会や仏教界の状況も大きく異なる。

一方で近時、曇鸞の生きた北朝期の仏教研究は活況を呈し、それは敦煌出土の文献などをもとに急激に進む地論宗の研究、造像銘などから明らかとなりつつある地域社会における民衆の信仰の諸相、僧伝などを含めた多様な文献から六朝期の仏教者の姿を描き出す試みなどに代表される。これらの研究では、北朝仏教を隋唐仏教へのつなぎとしてみるのではなく、北朝期の仏教自体の思想と実践とを丁寧に凝視していくという手法が意識的に採用されている。

曇鸞研究の場合も同様に、時代性、地域性を考慮した同時代的視野をもってその思想と実践をみることで、新たな曇鸞像がみえてくるものと思われる。これまでにも同時代的視野における曇鸞研究が志向されたこともあるが、北朝仏教に関する資料の不足や、曇鸞自身の仏教界における位置が不明確なこと、曇鸞研究が独特の研究史を有していることなどにより、満足な成果が得られているとは言い難い。よって、本研究では、近年に至るまでの北朝仏教研究の成果に広く目を配り、多様な文献を取り扱うことで、曇鸞の周囲にあった思想や実践の状況をできる限り明確にする。そしてその成果をもとに、同時代的視野から曇鸞の思想と実践を明らかにすることを目

的とする。

本論文の概要

第一章　曇鸞の生涯の再検討

第一章では、『続高僧伝』の「曇鸞伝」の内容を綿密に検討した上で、北魏・東魏の仏教界において曇鸞が思想的にどのような立ち位置にあったのかという問題を中心に、曇鸞の生涯について考察した。

第一節では、曇鸞の生涯を記録する資料（道宣『続高僧伝』、迦才『浄土論』、道綽『安楽集』、慧祥『古清涼伝』）の中で、『続高僧伝』の「曇鸞伝」の信憑性が基本的には最も高いことを藤善真澄氏の研究に依拠しつつ、論じている。そして、その『続高僧伝』「曇鸞伝」の概略を改めて整理した。

第二節では、帰浄以前の思想的素養を検討している。従来、『続高僧伝』や『魏書』「釈老志」などによって、曇鸞は、「北魏仏教の中心的思潮である羅什系統の般若教学を学んだ」などと簡単にまとめられることも少なくなかった。しかし、当時は、地論宗の台頭などにより、羅什系統の空観思想から、唯識思想や如来蔵思想の影響を受けた縁起思想へと仏教界の中心的思潮が変遷しつつあった。それは曇鸞の出家の地である五台山も例外ではなかった。曇鸞が羅什系統の思想の影響を強く受けていることは論を俟たないが、その思想的素養から、仏教界の中心的位置にあったとは言えない。また、『大集経』や道教的長生法に興味を持っていたことは、当時としてはごく一般的なことであり、曇鸞思想の多様な面の一つとして考慮する必要がある。

第三節では、「曇鸞伝」にみえる回心の逸話を手がかりに、浄土思想との接点がどこにあったのかを検討している。従来、「菩提流支との会見の結果、道教や神仙的な思想を捨て去り、『観経』を起点として浄土信仰に帰依した」という回心の逸話は史実としては信憑性が低いとみられていた。しかし、曇鸞を含む『安楽集』「六大徳」の僧侶たちは菩提流支と関わりが深いことや、『観経』も既にある程度普及していたとみられることを考慮すると、あながちに作り話とはいえず、特に、①浄土信仰における菩提流支との師弟関係、②『観経』を起点として浄土信仰に帰依したこと、という二つの要素は、曇鸞の中国仏教界における思想的な立ち位置を反映している可能性が高いと考えられる。

この第一章で得られた知見をもとに次章以降、同時代の社会状況、思想潮流と曇鸞の思想との関係を明らかにし、曇鸞思想の特徴について考察していく。

第二章　曇鸞と北朝社会

第二章では、当時の不安定な世相において、曇鸞が社会をどのように捉え、その社会認識が曇鸞の思想にどのように現われているの

かについて、特に『論註』上巻の観察門釈に注目して考察した。

第一節では、主に伝記史料に基づき、曇鸞に対する皇帝の帰依の実態について考察した。曇鸞は教義的な面、特に浄土思想の面において世俗権力への影響力はそう大きなものではなかったとみられる。むしろ、神異的、医学的な能力を有すること、南朝梁で仏教を学んできたことによって、皇帝を中心とした世俗権力からの尊崇を受けていたと考えることができる。

第二節では、『論註』にみえる国家権力に対する意識を、世俗権力と仏教界が密接な関係にある当時の状況を踏まえつつ、検討した。曇鸞の国家に関する認識をみる上で重要なのは、『論註』上巻の観察門釈である。そこでは、浄土の清浄なあり方と対照的な此土の迷いのあり方が示されている。その中には、君主が入れ替わることによって不安定な世相がもたらされること、生まれ出た環境によって思うような社会的地位が得られないことといった権力をめぐる衆生の苦悩が生々しく描かれている箇所を見出すことができる。一方で、阿弥陀仏を「浄土の君主」として位置づけることなどによって、此土とは対照的な浄土の平等性が強調され、そのような浄土を建立した阿弥陀仏の絶大な慈悲が説かれている。曇鸞はその生涯、特に後半生において国家と関わりを持っていたが、国家権力の持つ危険性を鋭敏に感じ取っており、当時の人々を悩ませた権力をめぐる苦しみからの解放を、阿弥陀仏の浄土に見出したということができる。

第三節では、『論註』上巻の観察門釈全体の構成について論じた。そこでは、「此土には様々な苦悩が広がっているため、法蔵菩薩はそのような苦しみの存在しないような浄土を願い、それが『浄土論』所説の荘厳相となった」という枠組みをもって注釈が施されていた。そして、此土の様子を描写する際には、身分制社会の桎梏、前述の国家権力がもたらす不平等な社会のあり様などといった当時の北魏社会が抱える問題点が鮮明に表されている。その際、曇鸞は『無量寿経』などにはない独自の願文を作成することにより、その問題を超える阿弥陀仏の浄土の様相を示していた。中でも、此土の不平等性と浄土の平等性に並々ならぬ関心を寄せていることが看取される。曇鸞がそのような注釈を行った背景には、阿弥陀仏の本願は今、ここの北魏社会を生きる自身と人々のために現にはたらいており、『浄土論』に記される浄土の荘厳相は自身と人々の苦悩を解放するはずであるという確信があったと考える。

第三章　曇鸞と同時代の実践との関係

第三章では、当時行われていた様々な実践と曇鸞の行った実践との関係について論じることで、曇鸞の実践の特徴を明らかにしようとした。

第一節、第二節では、『論註』に出る五念門・十念という二つの行に通底する「願生」という概念について考察している。ここでいう願生とは、阿弥陀仏の浄土に対象を絞り、そこへの往生を願うこと、である。そして先に結論を述べれば、願生という概念は同時代

の他の実践と自身の実践とを区別するために、自身の実践の旗印のようにして用いられたものであると考える。たとえば、『論註』下巻の起観生信では五念門の一つ一つの行を詳しく解釈しているが、それぞれの後半部分では「〇〇のような行ではない」というような否定的な表現で、当時行われた実践を〇〇と引きあいに出しながら、五念門の正しいあり方が提示され、その際に願生が強調されている。十念についても同様の構成を見てとることができる。そもそも『浄土論』にも願生は重んじられる概念ではあるものの、『論註』はそれを一層推し進めることで、曇鸞の住む山西省で流行していた「多仏に礼拝称名し懺悔する」実践や、僧稠などの著名な僧が実践していた四念処などの観法との差別化を図ったと考えることができる。

第三節では、『論註』における階位の超越説と南岳慧思の速疾成仏説とを比較することで、曇鸞の主張の特徴について論じている。『論註』に示される階位の超越説と慧思の速疾成仏説は、表現、内容ともによく似通っており、両者の間に思想交渉があった可能性を指摘できる。特に沈空の難に陥った際に、諸仏に見えることによって第八地の無功用の位への頓入を目指す点において一致しており、そしてその階位の超越説は一般に理解されにくいことを示す点においても共通している。そして、南岳慧思が迫害を受けたように、当時、階位の超越説は受け入れがたい教説であったようである。一見不自然に見える『論註』における階位の超越に関する説きぶりは、そのような仏教界の状況に配慮したものであった可能性が高い。一方で、『論註』の階位の超越説には、慧思のそれとの決定的な相違もある。『大智度論』も慧思『法華安楽行義』も沈空の難を脱するには諸仏の加勧を必須とするが、『論註』はこの諸仏の加勧がない時には行者は二乗に堕してしまうことに注目する。そして、その場合にも阿弥陀仏の浄土で阿弥陀仏に見えれば、この難を脱することができるというのである。このことから、曇鸞はここでも、阿弥陀仏の功徳の絶大なることを基盤に置いた成仏道を提示したということができるだろう。

第四章　曇鸞と同時代の諸思想との関係

第四章では、北朝仏教界の種々の思想と曇鸞の思想とはどのような関係にあるのかをいくつかの視点から論じた。それにより、曇鸞の思想の特徴について改めて考察している。

まず第一節では、『論註』にて『浄土論』の十七の国土荘厳を分類する際に総相・別相という概念を用いていることについて論じた。この荘厳相の分類は、『浄土論』そのものの分類法とは明確に相違するものであり、その依拠するところは従来明らかではなかった。しかし、本論文では近年の研究成果を依用することで、この分類方法が地論宗の六相という経典解釈方法ときわめて似通っていることを明らかにした。そして、『論註』の総相・別相の概念はその影響を受けて成立したものであったと考える。地論宗の六相、特に総相・別相とは、経典の内容を総と別とに分類し、総を教の根本的部

分、別を副次的部分と位置づけて、別相のどの部分にも教の真実性を認める思想である。そして、この地論宗の六相の用い方を踏まえると、『論註』がこの解釈法を『浄土論』の「願生偈」に適用していることは、曇鸞にとって「願生偈」は経典に近い存在であり、曇鸞は十七種荘厳のすべてが「教」としての機能があると認識していたと考えることができる。

次に第二節では、望月信亨氏による『大乗起信論』と『論註』との類似を指摘する論に着目し、『論註』の難易二道説、『起信論』の「専意念仏説」、そして『十住毘婆沙論』「易行品」の三つの教説を比較している。比較の結果、三者は一般的な行を修めることが難しい者に対し、阿弥陀仏などを対象とした行によって速やかに不退に至るという道筋を示す点において同一である。そして、難易二道説と「専意念仏説」は先行する「易行品」を解釈する中、①細かな表現の変更、②浄土不退の明示、③阿弥陀仏一仏への専一性の強化、④仏に見えることができない宗教的危機感による浄土への帰依、といった類似した展開をみせていた。両書が同系統の浄土信仰を伝えていることはまず間違いない。そして、近年の研究に鑑みると、『起信論』の「専意念仏説」は菩提流支周辺の浄土思想を伝えたものと思われるため、『論註』の難易二道説は菩提流支周辺の浄土思想の影響によって形成されたのではないかという仮説を提示している。

そして第三節では、『安楽集』に六大徳として挙げられる道場と慧海、そしてその二人と関わりのある道詮という僧侶たちの浄土信仰について検討し、曇鸞の浄土思想との関係を論じている。考察の結果、三人の浄土信仰は、五通菩薩ゆかりの阿弥陀仏の画を実践に用い、『大智度論』を重んじていた点で共通していた。そして、道詮と曇鸞の場合には『楞伽経』「龍樹懸記」に基づいて阿弥陀仏を信仰していた点に特徴があった。注目されるのは、彼らの信仰が曇鸞と同様に、龍樹を重んじた上での浄土信仰であったという部分である。そこで曇鸞における龍樹の位置づけを改めて検討すると、『讃阿弥陀仏偈』における「龍樹懸記」の依用や迦才『浄土論』の逸話などから、龍樹を自身を含めた衆生を浄土に導く存在と見なし、その衆生の一人として自らも浄土に願生するという強い認識があったことを指摘した。このことは、曇鸞が『浄土論』の著者である世親を、阿弥陀仏の浄土に往生するよう自身にはたらきかける存在と見なしていたという殿内恒氏の指摘と軌を一にしている。曇鸞は、世親『浄土論』の偈頌の「普共諸衆生　往生安楽国」の「衆生」に自己を重ね合わせ、さらに『楞伽経』龍樹懸記に説かれる「龍樹による衆生教化」の「衆生」に自己を重ね合わせており、両書の記述の中に自己の存在を読み込んだと言うことができよう。さて、上の三人の僧侶のうち、道場は菩提流支と関わりの深い人物であり、ここでもやはり曇鸞が菩提流支周辺の浄土教の影響を受けていることが想定されると考えられる。

結　論

同時代的な視野において、曇鸞の思想と実践とを検討した結果、当時の社会状況や当時行われていた様々な実践・思想が曇鸞に影響を与えていたことがいくつかの観点から明らかとなった。たとえば、きわめて不安定であった北魏社会の状況、当時流行していた禅定・懺悔・称名といった仏道実践、地論宗の思想、菩提流支周辺に存在した浄土思想などである。従来曇鸞は北朝仏教の中で孤立した存在のように位置づけられることも多かったが、本論文の考察の結果、曇鸞の思想は決して時代の思潮と無関係に成立したものではなく、同時代の実践や思想の流れの中で成立していたことが明確となった。このことは従来曇鸞の思想背景とされてきた、龍樹を中心とする中観系の思想、世親を中心とする唯識系の思想、もしくは、鳩摩羅什や僧肇の思想などからの影響を否定するものではない。その双方の影響を受けつつ、曇鸞は「無仏の世、五濁の時」、言い換えれば、六世紀初め、中国において生きる人々と自己とに適用可能な成仏道を形成したと考える。

また、本論文のもう一つの成果は、同時代的な思想や実践や社会状況を曇鸞は意識しつつも、自身の仏道の根本には阿弥陀仏の本願力、他力があることを強く認識していたことが改めて確認されたことである。たとえば、当時の不安的な社会状況を歎きつつも、それを超越する本願が当時の社会に確実にはたらいていることを『論註』は説く。また、流行していた実践と自身の実践の相違の根本には阿弥陀仏一仏の絶大な功徳のあることを、くりかえし『論註』は強調するのである。曇鸞の仏道の根本に阿弥陀仏の本願力のあることはよく知られていたことではある。しかし、当時の思想を「唯是自力、無他力持。如斯等事、触目皆是」と、実際に目につくものが自力の仏道ばかりであるとして批判した曇鸞の心境を、当時の仏教界の様相の中に位置づけて論じたところに本論文の意義があると考える。